

私は他大学の大学院に進学した後、新聞社の記者職の内定を頂きました。私の場合、面接の開始が4月から8月に変更された特殊な時期の就活で、記者職以外はほとんど就活をせず、研究とは別にやりたいことができたための就活だったので、結果はあまり気にしてなかったこともあり、広く皆さんの役に立つ情報ではないかもしれませんが、気にせず自分のことを書きます。

### 1) 就活中

まず、内定を頂いたのが8月中旬（決して早い方ではない）ということからも分かる通り、本格的な試験や面接が始まってから就活が終わるまではあっという間でした。出会った人に尋ねてみると、皆が一様に「前もって様々な会社の説明会などに参加していたのに、8月からの試験や面接の日程が多く重なった。8月の第一週あたりですでに残っている会社が少ない」といった不満を漏らしていました。記者職のみの私でも、日にちが重ならないようにネットでの日程予約をいち早く取りました（少しでも遅れると、都合の良い日にちが埋まってしまい、どこかの会社は諦めるといったこともあります）。37°Cの炎天下の中である会社の実技取材を終えたら、すぐにまた別の会社のグループディスカッションに行くといった日もありました。面接等で嫌な思いをしたこともありますし、とにかく気力・体力・知力を保つことで精一杯だったかもしれません。

### 2) 就活以前

本格的な就活の日程が遅かったために、インターンシップや説明会などは修士一年の頃から多々ありました。仕事の内容や会社の雰囲気を知ることができた半面、結局は就活時期が延びただけで、研究したいがためのストレスはかなりありました（哲学や研究書ならまだ何とかありますが、小説や詩など、深く没入したいような読書は難しい）。また記者職の場合、インターンはESや論作文などの審査を通らないと参加できないことが普通です。私は記者に内定していた先輩を紹介してもらい、インターン用のESなどの添削をしてもらったおかげで、無事参加することができました。私が参加した三つのインターンは、どの会社もある程度力が入ったものでしたので、良い面だけでなく、どういうことを自分が我慢しなければならないのかといった世知辛い面も知ることができ、それを本番用のESや面接に活かすこともできました。このように、インターンなどを通じて、志望動機を明確にするなどの事前準備をしていたので、本番で慌てることも少なくてすみました。修士一年から、研究（自分で調べるだけでなく、人付き合いから教わることも含む）と就活の間で引き裂かれながらフル回転していたので、すべてが終わってからこの文章を書いている今に至るまで、私は小説の世界に浸って充電しています。

### 3) 就活後

私は二つの会社から内々定を頂いたのですが、それはまず、記者という仕事の性格に与る

ところが大きいです。いくつかの会社の記者職は、二十代後半から入社する人も多いです。また、事前の準備（ES、論作文、筆記試験、面接）をある程度していたおかげでもありません（ちなみに、グループディスカッションは何の対策もしませんでした、常日頃ゼミなどで鍛えられていたので、すんなりとできました。基本は礼儀正しく、雰囲気良く、そして論点を明確にすることです。文学部生は意外と得意なことかもしれません）。ですが学部生の方は事前の準備以前に、将来どうしたいのか分からないという人も多いかもしれません。説明会などに一、二年の頃から参加してみるものひとつの手です。情報がなければ何も始まりません。ですが、エビデンス（明らかなこと、証拠）でないことに比重をおく文系の学生にとって、エビデンスで成り立つ社会に触れるのは嫌気がさすかもしれません（笑）。それはそれで、文学、言語学、哲学などの人文知を改めて考えるきっかけになるかもしれません。一年留学してゆっくりと将来を考える時間を得たり、教職をとりながらの就活や院進学も選択肢としてあるでしょう。

ただ、自分にも他人にも過度に期待せず、自分に向かないものは思い切って切断することが大事だと思います。無責任ですが、人生何とかあります。たぶん私も「特殊人」枠で拾ってもらいました。また、今は転職する人が増えてきた時代で、ひとつの会社に勤め続けるという形態が崩れつつあります。22歳での就職がゴールではないです。面接などにも面接官や質問との相性があります。面接官はあなたの本音を聞きたいわけではないですし、自分の全てを分かってもらえるわけがないと思っていれば、傷つくことも少なくすみませす（少なくとも私はそうでした）。

かくいう私は、ネットも含めた情報のプラットフォームの整備や、取材形態の複数化をしたいこともあります。本音のところは死ぬまで小説を書きたいので、名刺一つで様々な場所や人を訪れることのできる記者を目指していました（最も敬愛する作家 G.マルケスやサルトルにも記者経験があります）。これは面接でも言ってませんし、今も無理した文体で書いています（笑）。真面目なことは言いません。とにかく、こんな奴でも大丈夫だったということを皆さんに感じていただければ幸いです。

（フランス文学専修卒）